京都府日吉町森林組合②

森をゆく ◆180◆

「山守りたい」組織改革

日吉町森林組合は京都の山奥のありふれた組合だ。それが、どうやって一番元気な森林組合といわれるようになったのか。この話は一人の男の才覚と努力を抜きにしては語れない。

日吉町森林組合の湯浅勲参事(58)。改革を進めてきた中心的存在だ。高校を卒業してエンジニアとして働いてきた。「飯を食うために金をもらうだけ」。そんな暮らしに疑問がわいていた時に、父親から森林組合の職員を探してくれと頼まれた。

安月給である。簡単には見つからない。直感のようなものがあったという。「山を守る」という仕事なら使命感が持てるかもしれない。給料は半減したが、自分が引き受けた。生まれ育った地である。故郷が呼んだのだろう。1987年、35歳の転身だった。

故郷の森は荒廃が目立っていた。森林の所有者は高齢化で林業ができなくなっていた。後継者は村を出て行き、手入れのために山に入ることもしなくなり、間伐もできない。森は放置され、荒れが進んでいた。

日吉町の森林は日本の森林の縮図を見ているようだ。町の約87%を森林が占める。人工林の割合は41%、ほとんどが私有林で1人当たりの平均所有面積は約8㌃、約20%が不在山主だ。

京都の街まで約50㌔の所にあり、かつては薪や木炭の供給基地として栄えた。昭和の時代には電柱の需要が多く、日吉の森からかなりの杉丸太が出荷されたという。エネルギー革命で薪炭の需要はなくなり、電柱はコンクリート製になっていったが、建築ブームで木材の不足から、拡大造林で雑木林は杉、ヒノキの人工林に姿を変えていった。20年間で2500㌶もの人工林が出現した。

組合もまた「昭和初期をそのまま引きずってきている人と組織だった」と湯浅参事は振り返った。35歳の再出発は、日吉町森林組合の再出発でもあった。(ジャーナリスト・米倉久邦)

日吉町森林組合の湯浅勲参事。組合活性化の立役者だ

日本の伝統美に光

和傘のランプシェード

グッドデザイン賞　海外でも高い評価

伝統プラス現代に合う新しい製品を作る試みが盛んだ。照明に新しい意匠を持ち込んだランプシェードのシリーズはグッドデザイン賞(2008年)を受賞。ドイツでもドイツデザイン賞を受賞し、ヨーロッパを中心に海外輸出も始まっている。

同シリーズを照明デザイナーたちと共同開発したのは京都に一軒のみ残る京和傘メーカー日吉屋。和傘の伝統的技法が絶えないよう技法は守っても、形にこだわらないことが製作のポイントだった。本来、和傘は40～60本の竹の親骨と、同数の竹の小骨を骨格として、ろくろと呼ぶ留め材でまとめて末広がりの形にするが、ろくろでまとめず筒状を基本とした。

また和傘の構築美を生かすため、ライトの下に放射状に張った小骨を入れる構造とし、小骨のデザインの伝統的美しさを透かして感じられるようにした。

コンパクトに畳めることも大きなメリットだ。何十本もの竹骨が和紙の生地を支えるように開くため、閉じると同時に自動的に骨の内側に生地が畳みこまれるため、畳む動作が非常に簡単できれいに閉じることができ、流通にもかさばらず在庫に場所をとらない。

また掛け軸を替える感覚で季節ごとにランプシェードのきせかえなども簡単にできる。素材は竹と木と和紙のみで環境にも優しいことが大きな特長だ。製品は1万9000円から。

【日吉屋】電話075(441)6644。

和傘の作り方を生かしたランプシェード